小堀夢情報新聞 ボランティア特集第8号
平成24年3月31日
発行責任者　小堀道和

感動を呼ぶたくさんの心寄り添う活動報告

第7号で子どもたちが石巻牡鹿地区のおじいちゃんやおばあちゃんたちと心通い合う交流活動「荻浜・泊浜ありがとうの会」を紹介しましたが、多くの感動を呼ぶ心寄り添う活動を新聞情報も織り交ぜながら第8号としてご紹介いたします。

子どもたちの応援が石巻荻浜の皆様の元気を引き出しました

子どもには大人たちを元気にする目にみえない大きな力があります。子どもたちの応援が荻浜の皆様の心にどのように受け入れられたかを荻浜の豊嶋祐二区長さんと阿部成一さんが話してくださいました。紙面半分を使った以下の紹介記事を読んでください。

平成24年3月15日　下野新聞

夢　新　聞　　第3種郵便物認可

東日本大震災1年

…から ともに
栃木―東北 ③

チーム龍JIN

那須烏山→宮城県石巻市

「この浜は、子どもの声ひとつ、しねぇから。本当に寂れた街になってしまって」

宮城県石巻市牡鹿半島の漁村の一つ荻浜。カキ養殖歴50年の阿部成一さん(67)は4日、1カ月ぶりに来た那須烏山市災害ボランティアチーム龍JIN代表の小堀道和さん(62)に、こう語った。

55戸160人が暮らしていた浜は津波で一変。今は、山沿い側に建てられた13戸の仮設住宅などで30人が生活する。阿部さんは「ここは70、80代の年寄りと漁業者の私ら4世帯だけ。子どもら若い家族は、街の仮設住宅に行ってしまった」。

だから、あの元気な声は忘れられない。

手紙から交流会

きっかけは手紙だ。昨年10月、同チームは荻浜で港のがれき処理などの活動をした。

その際、「おこめで元気になって」「下を向かずに上をみて」などと書いた児童らのメッセージと絵を添え、新米をプレゼントした。

後日、住所を唯一書いていた烏山小の姉妹の元に、阿部さんと妻まつ子さん(63)から手紙が届いた。児童ら全員の名前を記して「栃木のコメ、元気がでます。笑顔になれます」などと感謝の言葉がつづられていた。

ただ自宅や漁船、カキ養殖いかだなどすべてを失ったこと、住民が減って寂しくなったことも書かれていた。

前向きな気持ちへ手伝い
心のつながり励みに

交流会で「どこがいいですか」などと話しながら肩たたきをする堀江真裕子さん（左）。肩たたき後に自己紹介された阿部まつ子さんは「お母さんも来てくれたんだと知って、ぐっときてしまった。うれしかった」という＝1月28日、宮城県石巻市の荻浜中学校体育館

者は一時100人を超えた。連日、ボランティ者は一時100人を超えた二十数人は、それ
それ那須烏山市内の借り上げ『もう福島には帰らない
来月、新たな出会いが

手紙を読んだ児童や保護者から「気持ちを直接伝えたい」との声が上がり、同チームは1月28日、荻浜中体育館で交流会を開催。児童19人をはじめ保護者ら計40人が出向いた。

手紙が届いた姉妹の母、堀江真裕子さん(39)も参加。同たたきタイムではまつ子さんの元へ。終了後に自己紹介し「手紙がきっかけでお会いでき、同たたきも…」と話し始めたが、お互い感激で言葉が続かなかった。

児童たちは、よさこいソーラン踊りなどを披露。会場は、子どもの元気な声とお年寄りらの笑顔であふれた。

家路に就いたバス。阿部さん夫妻はずっと手を振り続けていた。

復興願う善意

4日、荻浜を訪ねた小堀さんらメンバー。「海の幸応援ファンド」で集まった善意の一部を、阿部さんらの区長である豊嶋祐二さん(59)に手渡した。

1口1万円で、協力者には豊嶋さんらから5千円分の海の幸が届く一方、資金は復興に役立ててもらう。

だが漁港の被害は大きい。カキ処理施設の再建費は1億円。全滅した200台のカキ養殖いかだの復旧は、まだ40台。カキ出荷には2、3年かかるため、成長が早いワカメ養殖に初めて挑んでいる。

豊嶋さんは「なんぼか収入を得たら、カキの機材や船の購入費に充てたいが、ワカメは初めてなので、先は見えない」と明かした。

小堀さんは「できることは小さいが、前向きな気持ちになれる手伝いをしたい」。あらためて思いを伝えた。

初収穫を数日後に控えたワカメの刈り取り船の上。阿部さんは、小堀さんにしみじみと語った。

「もう、やめっぺと思っていた。でも、子どもたちの絵とメッセージには涙した。すんごく、励みになった」

(小林治郎)

間もなく初収穫を迎えるワカメの状況を小堀道和さん(左)に説明する豊嶋祐二さん(中央)と、ワカメを刈る阿部成一さん(右)＝3月4日、宮城県石巻市の荻浜沖

この記事に紹介されている「もうやめっぺと思っていた。でも、子どもたちの絵とメッセージには涙した。すんごく、励みになった」の言葉に改めて勇気付けられました。

上の記事は第1陣として集まった「海の幸応援ファンド」を届けながら牡鹿地区の皆様が懸命に頑張っている様子を栃木から発信しようとビデオ撮りに伺った時のものです。

真心を届ける「海の幸応援ファンド」

ここで「海の幸応援ファンド」を紹介した次ページの地元下野新聞のトップ面の記事を読んでください。「海の幸応援ファンド」は単なる経済支援でなく一人一人の真心が通い合うものにしたいと願い考えたものです。そのために「海の幸応援ファンド」の受付窓口は私の携帯電話一本にしました。申し込んでいただく皆様一人一人に牡鹿地区の皆様が辛く困難な状況の中で応援してくれる皆様の恩に報いるため何としても復興したいと頑張っている現状を分かって欲しかったからです。牡蠣は出荷するまでに2～3年掛かるなど海の幸を届けられるためにはまだまだ時間もかかるし成功するかどうかも分からないのが現実なのです。

いつどんな海の幸を届けられるか分からないそれでも応援したいという方のみに申込用紙をお渡しすることにしました。

今の時代はネット販売で容易に物品が届く仕組みが出来上がっています。ネット販売の価値観で申し込んだ方から「いつになったら届くのだ」、「送られた物が期待はずれだった」というようなお叱りの声が現地の皆様に伝わったとすれば真心どころか悪魔のファンドになってしまいます。

平成24年2月29日　下野新聞トップ面記事

那須烏山のボランティアチーム

石巻復興へファンド

1万円出資　被災漁師から海の幸

宮城県石巻市の牡鹿半島の被災地を支援する那須烏山市災害ボランティアチーム「ＩＮＯＮ」は「海の幸応援ファンド」事業に乗り出す。集めた資金を生活再建や漁業復興に役立ててもらう一方、被災者からカキやワカメなどの海の幸が届く仕組み。ファンド協力者らが支援地域を訪れ、交流や買い物などをする復興応援バスツアーも計画しており、小堀直和代表は「被災地の皆さんが前向きな気持ち転換り戻せるよう手伝いたい」としている。

同チームは牡鹿半島の荻浜、鮎川、泊浜3地区を中心に交流活動や物資支援、炊き出し、がれき片付けなどの活動を展開。知り合った漁師の中には、家も漁具も流されて網の修理に困っている人や、収入源だったがれき処理の仕事が3月で終わるため支援が必要な人がいるという。

そこで少しでも応援の気持ちを伝え、前向きになれるよう手伝おうと同ファンドを企画。1口1万円を出すと、荻浜と泊浜の漁師から1回ずつ各2500円分相当のカキやワカメ、ホタテ、ホヤ、旬の魚などが届く。

また同ファンドの協力者らが実際に支援地域を訪れ、被災体験を聞いたり被災者らの仮設共同店舗ですしを食べたり買い物したりする定員30人の復興応援バスツアーを4月15日に企画した。3月17日正午からは「今後の災害ボランティアを考える集い」を南那須公民館で開催する。

牡鹿地区の被災者や那須烏山市内の仮設住宅の代表者をパネリストに、被災地の現状や課題、今後の支援の在り方について意見交換し、今後の活動の意味を再確認する。

集い当日は非常食の試食体験や産地直送の海の幸の販売も行う。参加無料だが、支援の思いを表す意味で新品タオル1本を持参する。申し込み、問い合わせは小堀代表、電話090・1611・5491（携帯）。

（小林治郎）

しかし、申し込んでくださる皆様と話をしていて心優しく温かな方がどうしてこんなにも多くいるのだろうと感動する毎日です。今も続いています。

あるおばあさんは「テレビで惨事が放映される度に協力できることは何でもしたいと涙しながら見ていたが、どうしていいか分からないままでいた。今回、このような形で役に立つことができて、本当にすっきりした。高齢なので何の支援もせずに終わってしまうのではないかと心配していた。本当にありがとう」と話された時は、電話で受ける制度にして良かったなと心から思いました。E-mail 受けでは寄り添う気持ちがあっても行動できない方がたくさんいるのです。

もう一つ嬉しいことは申込用紙の応援メッセージ欄が空白のままというのがほとんどなく真心の応援文がたくさん綴ってあることでした。牡鹿の皆様は応援メッセージをくまなく読んでいます。

「ありがたいな～」とみんなが言っていると伝えて欲しいと豊嶋さんも平塚さんも話してくれました。

ファンドについては市の広報誌3月1日号にも掲載しました。ファンドを公にして1か月ほどですが、市内や栃木県内の方々、加えて遠くは高知県や岡山県など私の夢新聞を読んでいただいている皆様など申込者は既に150名を超えました。

荻浜及び泊浜の皆様が「何としても復興を成功させ恩返ししようよ」と話されていたことが常に私の頭をよぎります。真心通い合うファンドになるようさらに努力して参ります。申込の有無に拘らず皆様の心からの応援をよろしくお願いいたします。

３月２０日ファンド集計第２回目分を荻浜・豊嶋家に届けました

同日泊浜・平塚家にも届けました

子どもたちや先生の情熱に感謝

1月28日に荻浜中学校で実施した「荻浜・泊浜ありがとうの会」に小学生のお子さんと参加した泊浜のお母さんから「このような心温まる会ができたのも何かの縁だと思います。

自分たちの谷川小(児童 7 名)は今年で閉校になり、大原小(児童 20～30 名)に統合されます。荻浜小(児童 9 名)も含めて栃木の烏山小(児童 600 名超)と何らかの交流ができるといいなと思います。小堀さん、取り持ってくれませんか」と相談されました。

市教育長と烏山小学校長と相談した結果、烏山小5年生を対象に私がボランティア特別授業をやることになりました。

いろいろ考えた末「津波が全てを奪い去り、残された人々を絶望の縁に追いやってしまったが心から応援してくれる人がいると分かるだけでとても元気になると被災された皆さんが言っている。そこで、相手の気持ちになって牡鹿の小学校に手紙を書いてみませんか」という授業を実施することにしました。

烏山小５年生約 100 名(3 組)の手紙

書いてくれた手紙には温かい言葉が散りばめられていました。卒業式間近にも拘らず烏山小の先生方が時間を割いて情熱を注いでくれたことに感謝すると共に子どもたちの素晴らしさを実感しました。3クラスの内の１クラスは千羽鶴まで折ってくれました。

牡鹿地区の各小学校長に趣旨を説明し、烏山小のこどもたちが一生懸命応援する気持ちを書いたことと年度末で大変なので返事は不要であること、来年度になったら何らかの交流ができると嬉しいですと伝えて手紙を送りました。牡鹿地区の各小学校長先生の「私たちを思ってくださっていることが本当に嬉しいです。ありがとうございます」との言葉が温かく私の心に響きました。

心のこもったメッセージ付き千羽鶴

震災から１年 今後のボランティア活動を考える集い

龍 JIN 発足後、たくさんの活動を実施してきましたが、当初のガレキ処理中心から徐々に心寄り添う活動に変わってきました。3月17日、震災1年の節目に130名を超える多くの皆様の参加のもと、「震災から1年　今後のボランティア活動を考える集い」を実施しました。

オープニングの前座として市婦人会による非常食の試食会や消防署の協力で煙道体験コーナー、石巻荻浜から生わかめを送ってもらっての産地直送品販売やいつも応援してくださるムラおこし応援団のピザ焼きコーナーなど豪華なプログラムでスタートしました。

オープニングでは大谷市長を始め来賓の皆様から「龍 JIN は今や栃木県を代表するボランティアチームとして活躍していて頼もしい。今日は被災された各地の代表者の話が聞けるので共に学びたい」との挨拶をいただきました。

第一部では牡鹿地区から阿部さんと江刺さん、市内岩子仮設住宅曽根原自治会長、福島原発20Km 圏内富岡町出身の齋藤さんに龍 JIN メンバー2名を加えて震災から1年を振り返り、今、皆さんに伝えたいことを話していただき今後のボランテイア活動を考えるシンポジウムにしました。

詳細は次頁の下野新聞記事を参照してください。

那須烏山で震災1年シンポ

「顔見ただけでうれしい」

東北の被災者ら心境語る

心つなごう 東日本大震災

【那須烏山】市災害ボランティアチーム龍JINなど主催の「震災から1年 今後の災害ボランティアを考える集い」が17日、南那須公民館で開かれた。

第1部のシンポジウムでは、宮城県石巻市の牡鹿半島から阿部泰子さん（67）と江刺みゆきさん（70）、那須烏山市の仮設住宅代表の曽根原勉さん（63）、原発事故で同市内に一時避難して現在は福島県郡山市の仮設住宅で暮らす同県富岡町出身の斎藤秀雄さん（63）ら7人が登壇。

娘の夫らを亡くした阿部さんは、同チームのメンバーとの交流を振り返った上で「何度も会っているうち、顔を見ただけで、電話で声を聞いただけで心が慰められ、うれしい」と心境を語った。

江刺さんは「仮設住宅は年寄りばかり。やれる範囲で頑張ろうと思うが、海の仕事を手伝ってほしい」とした上で「お年寄りの中には死ねばよかったと言う人、交流会などへの参加を呼び掛けても出て来ない人もいる。それをどうしたらいいのか」と打ち明けた。

斎藤さんは「いつ帰れるのか、あてのない暗闇の中。自宅の放射線量は1時間に11マイクロシーベルトあり、人間の住める状態ではない」と厳しい現状を紹介した。

同チーム代表の小堀道和さん（62）は「みんなが手を差しのべることをしただけで、すごい力になる。ボランティアはいろんな形があるが、心をいかにつなげ合うかだ」と、今後のボランティアの在り方を確かめ合った。

同チームが応援する牡鹿半島の漁師らからのビデオメッセージ上映や交流会参加児童の感想発表も行われ、来場者ら全員でふるさとを歌った。

（小林治郎）

震災1年後の現状を紹介、今後の災害ボランティアを話し合ったシンポジウム

第二部はボランティア活動に参加された多くの団体・個人から今までの活動を振り返りながらこれからこんな応援・支援を考えていきたいかというメッセージを発信してもらいボランティア意識を高めて行く場にしました。

烏山高の鏑木先生からボランティアに参加した生徒の成長という観点から話していただいたり、ベルギー出身のダークさんから日本人の不得意とする行動力の大切さを語りかけてもらうなど盛りだくさんのプログラムでした。

参加者の心を捉えたのはやはり子どもたちの純粋さでした。

野球部キャプテンの渡邉君の「石巻に行って」の感想文朗読は聞く人の心に染み入り、思わず涙してしまいました。この夢新聞が長くなるとのお叱りを受けても何としても読んで欲しく全文を最後のページに紹介いたします。

さらに参加者の涙を誘ったのはガールスカウトの荻浜に行って活動した感想コメントです。「肩たたきしたおじいさんから言われたありがとうの言葉が今でも忘れられません」や「友達になった荻浜中学生のお姉さんと別れる時、泣いてしまいました。手紙をもらった時はとても嬉しかったです。またボランティア活動に参加してたくさんの人に喜んでもらいたいです（小2年）」等々次々に発表するガールスカウトの子どもたちの言葉には確かに天使が乗り移っているのではないかと思うほどでした。

牡鹿での感想を紹介するガールの子どもたち

会場が一つの輪で繋がり「いっつもいっしょだべ　心と心　手と手をつないで結(ゆい)づく

り」のスローガンの通り、手と手をつなぎながら歌手の岡倉ゆかりさんのリードで「ふるさと」を参加者全員で歌い集いを終了しました。　　↓会場が心ひとつになって歌った「ふるさと」

参加者のアンケート紹介

参加者の感想文は「心寄り添う活動の大切さが良く分かった」、「自分でできることに積極的に参加する勇気をもらえた」、「龍 JIN の活動に共感し応援したい」等々、用紙に書ききれないほどたくさん書いてくれました。原発問題に対する複雑な思いを書かれた方もいました。

被災された内容や問題の大きさ深さに違いはあるものの心寄り添う大切さ、そして実際に行動するようにお互いが働きかける大切さを共有できた「震災から1年　今後のボランティア活動を考える集い」でした。

下記が野球部キャプテン5年生渡邉寛之君の感想文です。じっくり読んでください。

石巻に行って　烏山小５年　渡邉 寛之

１月２８日、ぼくは宮城県石巻に行きました。バスの中から見た石巻の景色にぼくはおどろきました。道路ぞいにある大きなスーパーの窓ガラスは割れ、うす暗く、人の気配もありませんでした。

また、がれきが大きな山のようにいくつも積み上げられ、そこから何かのけむりが白く立ち上がっていました。

バスの中のだれかが、この場所まで津波がおそってきたことを教えてくれました。テレビでくり返し見た津波のシーンが頭にうかびました。ぼくはおそろしくなり、少しの間ぼーっとしてしまいました。

しかしそんな景色の中にも、かべに板を打ちつけて直した家に明かりがともっていたり、商売を再開している店があったりで、少しずつ元のくらしにもどろうとしていることも分かりました。バスがある道にさしかかった時、ぼくらのかんとくが言いました。「この道は去年ボランティアに来た時には、海の水につかっていたんだ」と。今では車がふつうに通れるようになっているこの道。復興は少しずつたしかに進んでいるんだと感じました。

ぼくたちがバスで着いた場所は石巻市の荻浜中学校でした。校庭のすぐ前にきれいな海が広がっている、ぼくたち烏山の小学生にはうらやましく感じる場所にその学校はありました。あの日、この海が人や動物、建物におそいかかって来たんだとぼくは想像しようとしましたが、うまくできませんでした。きれいな海でしたが絶えず冷たい風が吹いていました。

体育館では荻浜と泊浜の人たちと交流しました。ぼくたちは、この中の何人かの人と手紙のやりとりをしていたのです。ぼくに手紙をくれた松川さんが、今日のためにみんなにお好み焼きを焼いてくれました。とてもおいしく、仲間はみんなおかわりをしていました。大変な時なのにそれでもお好み焼きを作ってくれた松川さんの気持ちに感謝し、ぼくは一切れ一切れ大事に食べました。

ぼくは荻浜と泊浜のみんなをはげまそうと思ってボランテイア活動に参加しました。でも逆にがんばれと言われたような気がしています。今まであるのが当たり前であると思っていたことが当たり前ではないこと。荻浜中の野球部は５人。そんな少ない人数でもぼくらが体育館に着いた時には、体育館でティーバッティングをし、その後は冷たい風が吹く校庭でキャッチボールや走塁練習をしていました。５人の先ぱい達の何人かは、甲子園を目指していると言っていました。どんなにきびしい条件の中でも夢を持って野球をしている。やる気や勇気をもらいました。

荻浜の小学生もおじいちゃんやおばあちゃんといっしょに住むことができなくなっています。苦しい中でも希望を持って生活をしている人達ががんばる力を決してなくさないよう、ぼくたちができることを真剣に考えたいです。

メディアも龍 JIN の活動を応援してくれていることに感謝です

新聞やテレビなどのメディアも龍 JIN の活動を応援してくれています。多くの皆様に心寄り添う活動を呼びかけてくれます。感謝です。下記は栃木での活動を紹介してくれた朝日新聞の記事です。

平成 24 年3月 9日　朝日新聞

仮設照らす粋な花火

那須烏山、いまも励み

つながる　東日本大震災1年　3

昨年5月28日、那須烏山市の元小学校長小堀直和さん(62)は、宮城県石巻市にいた。日産自動車の工場長から校長に転じ、2010年に退職。震災で石巻に住む妻の叔父の行方が分からなくなり、インターネットで避難所の名簿を捜し回った。無事は確認できたが「現地を見るだけではいけないな」と、鉄板入りの長靴に泥だらけのズボン姿でがれきを運んだ。

何度か被災地へ出向いたあと、「こんなに喜ばれるなら、みんなもっと参加すべきなんだ」と、昨年7月1日、災害ボランティアチーム「龍JIN」を結成した。主なメンバーは自営業者や主婦、会社員ら約20人。バスを借り切り、手作りの毛糸の帽子やカレンダー、タオルなどを東北に届けた。

会議室に集まりシンポジウムの内容や活動について話し合う小堀さん（中央）らボランティアチーム龍JINのメンバー＝2月13日、那須烏山市初音

東北を向いていた龍JINだが、7月中旬のミーティングで、メンバーの大橋智江さん(30)が漏らした。「私たちの町も被災地だよね」。あっ、そうか。仮設住宅があるね。子どもたちを喜ばせられないかしら。そりゃいいね。仮設住宅の自治会長を務める曽根原勉さん(62)を訪ね「夏祭りをしたい」と申し出た。

フィナーレに花火を打ち上げ、住民をあっと驚かせたかった。でも予算は募金などで集めた2万円しかない。メンバーが「1発でもいいから」と地元の花火師に頼みこんだ。

8月28日、仮設脇の駐車場で、ヨーヨー釣りやかき氷の露店がにぎわった。午後7時ごろ「3、2、1、――」とメンバーがカウントダウンを始め、夕暮れの空が急に明るくなった。

あれ、どうして？　小堀さんは目を見張った。1発のはずだった花火が数十発打ち上がり、5分間にわたって仮設住宅やがれきの山を照らし続けた。

「ボランティアって、こういう気持ちが作るんだな」。轟音の中で、花火師の粋な計らいに感謝した。曽根原さんも「みんな同じ空を見上げていた。復興に向かう私たちと重なって見えた」と振り返る。

自宅が全壊した曽根原さんは、障害を持つ妻と2人で、昨年5月から仮設で暮らし始めた。壁に断熱材を張り、電気カーペットや電気ヒーターでプレハブの冬をしのいだ。

1年を経て、仮設の住民は少しずつ、自分たちの足で歩き始めている。計7世帯が転出した一方、朝になると仮設から仕事に向かう住人も見られる。曽根原さんも交通の便のいい市外への転居をやめ、市役所や駅に近い新居を探し始めた。

「那須烏山を離れようとは思わない。一緒に生きる仲間を見つけた」。17日には龍JINのシンポジウムに参加し、震災後の1年で縁のあった人々と意見交換する。（浜田知宏）

追記：３月２７日「宮城県漁協連絡会は、 宮城県沖のスズキで比較的高い値の放射性セシウムが検出されているため漁業者に水揚げの自粛を要請する方向」とのニュースが流れました。

ファンドをどうしようと思い真っ暗な気持ちになりましたが、牡鹿地区のような宮城県北部は安全と知らされほっとしましたが福島の人たちの辛さ悔しさに思いをはせました。ずっと心寄り添わねばと強く思いました。

ファンドはずっと受け付けています。友知人に声を掛けてくださると嬉しいです。